

## ●特集●

## 保育の新時代への期待

3法令の施行から間もなく1年が過ぎようとしています。日本の幼稚園・保育所・認定こども園はこの改訂(定)を真摯に受け止めて、子どもにとって必要な保育の質的な向上に向けて努力しているのでしょうか。今回の特集は新しい時代に入ったと考えられる保育に対する期待について執筆いただきました。期待を裏切らない研究と実践に期待します。

### 研究者の視座から「保育の新時代への期待」について

大迫 秀樹

筆者は、福祉心理学を専門とする研究者であるが、これまでに児童自立支援施設の児童自立支援専門員、児童相談所の心理判定員(児童心理司)、情緒障害児短期治療施設(児童心理治療施設)の心理療法担当職員等として勤務してきた経験がある。また、大学の専任教員となってからも、あわせて、乳児院、児童養護施設、児童家庭支援センターの非常勤心理士として勤務を継続しており、現場での実践を重視している。もちろん、同時に、現場実践から得られた貴重な取り組みや示唆を学問的な立場から繋いでいくための研究者としての視点も大切にしている。今回は、これまでの経験から得られた知見について、主に2つの点から論じてみたい。

最初に述べたいのは、やはり子どもの日常生活を支援する保育という活動の重要性である。児童自立支援施設にて生活担当職員として勤務した経験は、その後の実践と研究活動を行う上での非常に大きな原動力となった。非行傾向を示す子どもたちと出会ってきたが、多くの場合、背景には被虐待経験があり、それによる心理面の傷つきが行動化という形で表出されている場合が多い。それ故に、心理的ケアという視点を持って支援していくことが重要である。施設には、多くの保育士が勤務しており、一緒に仕事をさせていただいたが、実際の生活場面を通じて優れた実践を学ぶことができた。もちろん、当時はまだ被虐待による心的影響の理解や心理的ケアについての知見は十分ではなかったが、保育士と協働して、心理学的な知見を現場に取り入れつつ、その効果等を、実践を通じて検証していくこと、つまり現場と研究を繋ぐことの重要性を感じたものである。その後、心理専門職として関わることが多いが、生活場面に関わる保育士の役割は極めて大きいと感じ

るし、また、素晴らしい実践を研究と繋ぐことで、その専門性を更に高めて欲しいと考える。

次に述べたいことは、保育におけるソーシャルワーク的な機能の充実の必要性である。これは現在の自身の研究テーマである「施設・里親における乳幼児期からの連続性を持った心理的ケア」の課題研究から得られたことの一つである(JSPS科研費JP26380820他)。この研究は、社会的養護を必要とする子どもたちにとっての人生の繋がりを構築していくための取り組みの現状やその支援方法等に関するものであるが、筆者は、実際に全国(沖縄から北海道まで)の乳児院や児童養護施設20か所以上を訪ねて、主として実地調査により、生の声を吸い上げていく方法により調査を行った。その結果からは、多くの施設で、心理学的な知見を取り入れながら、丁寧な生活支援を行っていたことがわかったが、それとあわせて、保育士が、ソーシャルワーク的な視点を持ちながら援助を行っていた。具体的には、子どもを取り巻く家庭、地域を含む環境、施設同士、あるいは里親との間での調整や連携を行い、子どもの人生を繋げていくような取り組みを行っていたことが明らかになった。子どもの育ちを支援する上で、いかに人生を繋げていくのかということは養育者にとっては大きなテーマであり、かつ保育の新時代に向けての重要な課題だと思う。

生活場面での支援の更なる充実とあわせて、ソーシャルワーク的な視点を取り入れることにより、今後の保育の専門性がますます高まっていくことを切望して、研究者の視座からの「保育の新時代への期待」とさせていただきたい。

#### ●Profile

大迫 秀樹(おおさこ ひでき)

九州女子大学人間科学部 教授、日本福祉心理学会 常任理事

これまで社会的養護の現場における実践に携わってきた。その経験を大事にしながら、児童福祉領域における「生活臨床と心理的ケア」という視点を重視した研究に取り組んでいる。

## 保育・幼児教育の「質の向上」に向けて

請川 滋大

保育・教育活動の「質の向上」が、2017年に告示された3法令においてより強調され、それに伴い園全体のカリキュラム・マネジメントなどが重視されることとなりました。この点について、今後10年間で良い変化が起こることを期待しています。幼児教育を学び始めて30年ほどになりますが、これまで保育実践がなかなか変化しないという実態を垣間見てきました。もちろん、良い実践を目指し、必死に保育の見直しを図っている園は数多く知っています。これまでも実際に見学をさせてもらうところは、そのような保育実践の改善に熱心なところが多かったと思います。ところが一方で、指針や要領の改訂が行われても何ら保育・教育に変化が見られず、旧態依然とした実践を行っているところも見聞きしています。小学校もほぼ時を同じくして学習指導要領の改訂が行われますが、その際、改訂後も教育内容や実践が変わらない小学校というのはないでしょう。義務教育だから、ほとんどが公立学校だからという事情はあるでしょうが、これほど小学校就学の前後で要領改訂の受け止め方が異なるという点には驚かされるばかりです。国としてこれからの保育・幼児教育を変えていこうとしても、実践の場が変わらないことにはどうにもなりません。

日本の場合、保育・教育の「質の向上」を目指すには1クラスの子どもの数が多すぎて、子ども一人ひとりの活動や自らの保育実践を丁寧に振り返ることができないという大きな課題があります。本来は国として、1クラスの定員を少なくすることに取り組んでほしいのですが、保育士や幼稚園教諭の確保が難しい現状では簡単なことではないでしょう。この厳しい状況の中でも、様々な工夫をしながら保育実践を良くしていこうとしている園が多くあります。そういった優れた実践を多くの人たちに知ってもらうことも重要と考えており、養成校の教員として、そういった優れた園と関わりながら、学生たちや実践者にも知ってもらう機会を持つようにしています。

「質の向上」を目指すには、記録を書いたり計画を見直すという、実践の振り返りのための時間がどうしても必要です。小学校は、教育課程の時間と放課後の時間（学童保育など）の担当者は別です。どちらも担当していたのでは、教育のための準備時間が取れません。

今夏、ニュージーランドの幼稚園へ行った際に先生方の勤務表を見せてもらったところ、そこに「NC」と書いてある時間帯がありました。「NC」の意味は何かと尋ねると、ノンコンタクト・タイム（Non-contact time）の略であるといわれます。シフト表に示されたす

べての教員にはノンコンタクト・タイムが確保されており、その時間を使ってラーニングストーリーを書いたりしているのだそうです。ニュージーランドは日本に先んじて幼児教育の無償化を実施した国で、週に20時間までは幼児教育を無料で受けるようになっています。現在、日本でも保育の無償化について議論が進められていますが、ただ単に無償化するだけでなく、保育や幼児教育の「質の向上」を見据えた上での政策にしなくてははいけません。量を拡充することだけでなく質の向上も共に進めてもらい、日本に住む多くの乳幼児が質の高い保育・幼児教育を、家庭の経済事情によらず皆が受けられるようになることを願っています。

### ●Profile

請川 滋大（うけかわ しげひろ）

日本女子大学家政学部児童学科 准教授

各園が3法令改訂をどのように受け止め、また、どう変化しようとしているのかに興味がある。園内での議論、研修の内容、実践の変化などについて、大学院生と共に聞き取りを進めている。「3つの柱」や「10の姿」だけでなく、幼児期の「教育」の扱いやカリキュラム・マネジメントなど、調べるべきポイントは多そうである。

## 保育のなかの実体験について考える

滝口 圭子

保育とその周辺が目まぐるしく動いています。『幼児教育の経済学』（ヘックマン, 2015）の上梓が一つの画期となったことは確かでしょう。本書の原題はGiving Kids a Fair Chance（全ての子どもに公平なチャンス）で、「貴重なのは金ではなく、愛情と子育ての力なのだ」（それはそれで深刻ですが）という文言もあり、多様な意味を読み取ることができそうです。いずれにせよ、本書により幼児期の保育の重要性が世に伝わりました。では、これからどうするのが問われる局面に差しかかっています。

以下、これからの保育実践について、現在考えていることを記述します。高橋（2001）は、小学校1年生、3年生、5年生の3学期に、読解課題を含むいくつかの課題を縦断的に実施しました。その結果、小学校1年生の3学期では、就学前に平仮名を読むことができたグループの方が、就学後に平仮名の読みを学習したグループよりも、単語を読むスピードが速く、読解力も高かったそうです。しかし、3年生になるとその違いは消失します。一方で、小学校を通じて、読解力に強く関連していたのが「語彙」でした。「語彙」が豊富な児童ほど読解力が高く、また読解力が高いと次の時期の「語彙力」が高くなりました。就学前に平仮名が読めるということは、小学校低学年ではいくらかの影響があるようですが、中学年以降になるとあまり関係がなくなるというこ

とのようです。

ところで、平成28(2016)年度中央教育審議会幼児教育部会の取りまとめにおいて、幼児期の「語彙数」がその後の学力に影響を与えることが確認されました。そうした背景もあってか、保育者が野菜の絵カードを見せ、その野菜について知っていることを話すよう子どもに求めたり、月の満ち欠けの絵本を見せて満月、半月などの呼び方を教えたりという活動に遭遇することが増えたように感じています。それらの活動からは、実際の体験が抜け落ちているようにみえました。記号(絵カードのトマト)を記号(トマトにまつわる言葉)に移しかえる作業を繰り返すだけで、その後の人生を支える「語彙」が身につくのかどうか、少し疑問に思います。実体験(本物のトマトを五感でとらえる)と記号(トマトにまつわる言葉)の符合の蓄積があってはじめて、つまり、自身の身体と感情をくぐってはじめて、本当に使える「語彙」となっていくのではないのでしょうか。この「実体験」は、後々の「9歳の壁(峠)」(脇中,2013)との対峙にも関わってくるような気がしています。

社会の変化に伴い、子どもも大人も抽象化された情報の処理に追われる現在にあればこそ、以上のようなことを、実践を通して考えなければならないように思います。新しい時代に求められる保育は、スマートな記号のなかからではなく、生々しく泥臭い逡巡のなかから生み出されるのではないのでしょうか。

#### <引用・参考文献>

- Heckman, J. J. (2015) 幼児教育の経済学(古草秀子, 訳) 東洋経済新報社. (Heckman, J. J (2013) Giving kids a fair chance. Cambridge: MIT Press.)  
 高橋 登(2001) 学童期における読解能力の発達過程—1-5年生の縦断的な分析— 教育心理学研究, 49, 1-10.  
 脇中 起余子(2013) 「9歳の壁」を越えるために—生活言語から学習言語への移行を考える— 北大路書房

#### ●Profile

滝口 圭子(たきぐち けいこ)  
 金沢大学学校教育系所属。幼児期の祖母による毎晩の絵本の読み聞かせを契機として子どもの文章理解に興味を抱く。現在は、特別支援教育の巡回相談員として保育の現場に何い多くのことを学んでいる。最近の研究テーマは、幼小接続、子どもの里山自然活動、保育のなかの科学。

## 新しき良きは古き良き

司馬 政一

### ●遊具、そして人が群れる環境の再現

朝に子どもたちが登園してくると、園舎内や園庭等に遊びに行き、思い思いの遊びが展開されていきます。園庭には地下水を利用した小川や、起伏のある築山、高さのある木造の立体遊具、様々な乗り物(ストライダーや自転車、四輪の足こぎゴーカート)があり、園庭を駆けまわっています。また、四季を感じることでできる木々が植えてあり、冬にはたくさんの雪が降る地の利を得て、例えば無限の造形遊びに興じたり、デスクマットや米袋を使ったそり、ストライダーにスノーアタッチメントをつけて滑り降りたり、顕微鏡で雪の結晶を観察したりしながら過ごします。雪や雨の日でも、子どもが遊びたいのであれば外に出かけていきますし、この環境下で0~5歳の子どもたちが分け隔てなく過ごしています。その中では、一見危険な高さのものや難しいと思われる遊具がありますが、本来生活の中に当たり前にあった環境を園庭に再現したのであって、子ども自身で危険を感じ回避や予知する能力が備わるために必要な環境であることを、入園前から保護者にご理解いただいた上で成り立っています。園舎内にも様々なコーナー遊びや乳児室にはロフトなどがありますが、保育者が出すぎないことで0歳児から遊びに対する強い欲求や思考の深さ、危険に対する意識が備わっている様子を知ることができ、驚かされます。このことから、私たちが保育の深奥さを理解し子どもと向き合い挑戦し続けることこそやりがいと捉え、日々保育教諭と研究していかなければと思い、それが結果的に資質・能力の3つの柱(非認知能力)と育てほしい10の姿(五つの領域)に大きく貢献しているであろうと感じています。

### ●保育とは

「保育」を「育ちを保障すること」と捉えると、生活に氾濫している化学物質の危険についても私たちは意識していきたいものです。核家族化が進み、孤育てに悩み苦勞している保護者が増す一方で、効率化が図られ少しでも楽に生活できるよう技術革新が進んでいます。また、悪臭を強引に無くし、除菌無菌とせわしなく室内に薬剤をふりまき、安定した味と見た目が長期間保持される食物で、子どもや家族の身体を健やかに保とうとしています。化学物質は目に見えず、エビデンスがはっきりしないことから、排除への理解が得られづらいですが、“最近アレルギーの子どもが多くないか”、“特別な支援を要する子どもが増えていないか”という思いに対して、「その原因は？」という疑問を持ちながら、教職員と理解を進めています。自然との共生を拒絶し、人が生きることの利便性のみを追求した途



端、様々な弊害が同時多発的に起きていくことから目を背けることはできません。

### ●保護者とともに

園内には小さなカフェがあります。保護者のサークルやおやじの会などの活動もあります。最近ではニュージーランドの幼稚園と提携して親子留学も行っていきますが、大人も子ども同様に温かく緩くつながっているための仕掛けが少しずつ実を結んでいる気がします。これも、工夫をされているたくさんの園を視察させていただいているからこそ、私たち保育教諭はたくさんの方に気づかせていただきます。まだまだ足りないと感じられるから変革する力になります。保護者が憩える場、そして子どもの「生きぬく力を育む施設」としての在り方を、どのような時代になっても皆さんと大切にしていければと考えています。

#### ●Profile

司馬 政一（しば せいいち）  
幼保連携型認定こども園せいめいのもり 園長  
学校法人清明学園理事長として4園の運営にも携わる。2016年4月に幼稚園から認定こども園に移行。  
関心を持っていること、子どもが自ら育つ力を信じる保育と子どもの育ちの記録等について。

## 新たな時代に期待する ～地域の教育コンソーシアム

妹尾 正教

### ●「子ども主体」を一元化した意義

昭和40年の保育所保育指針策定（施行）から数えて、4回目となる今回の改定は、小学校以降の学習指導要領も、就学前の「幼児教育において育みたい子どもたちの資質・能力」から、全体の筋道を同じにしていこうという大きな決意を感じる。就学前教育において、どんなに創意工夫を行おうが、小学校の壁に跳ね返されることが多かったように感じてきた現場として、今回の意義は大きい。

そして、全体の筋道の大きな柱は、「子ども主体」であることが明確にされていることも歓迎すべきことである。AI化が推し進められていく中で、2030年には今ある職業の3分の2が入れ替わるといわれている。人間がAIに勝ることといえば、創造することである。どのような時代を迎えても、人間同士の交流から生まれる創造性は、すべての困難を乗り越えていくカギになるに違いない。そこに我々幼児教育者の信念があり、時代を構築していく術がある。

それには「教育」自体も、従来型の教師が教えるという一方的なものではなく、子ども一人ひとりに一市民として向き合い、内に秘められているものを引き出そうという謙虚な行為であることを自覚していくことが大切だ。

また、三法令に従うだけでなく、保育士も子どもたちが社会の中心となる未来を想い、本質を見越して、その先への哲学をもつことが必要である。「何のためにこの仕事をしているのか」「どこに向かっていくのか」という「哲学」が生まれてこそ、初めて保育方法に結びついていく。保育士は、やらされるのではなく、使命感をもって保育を創造的に行ってほしい。

### ●未来への課題と期待

厚生労働省では今年度から「質についての検討」が始まった。こういった動きを見ると、新時代が確実にやってくると大いに期待したい。

だが、現実には厳しい。保育の質とは何か、質の向上のための現場との協同的な行政指導監査のあり方、深刻な保育士不足、研修の機会の保障など、検討すべきことが山積みである。キャリアアップ研修を例にしても、各自治体に任されている部分が大きいため、方法、内容ともに一貫性のない現状が垣間見られ、政府と実施する自治体側とのギャップは否めない。

トップダウンでは成し得ない小単位での柔軟な取り組みこそが、地域の教育を変える可能性である。アイデンティティをもちにくい、主体性を発揮することは難しいと後ずさりする園も多いが、まずは、園を開き、地域と連携することから始めようではないか。

自園では、子どもたちが疑問に思ったことは、調べたり議論したりする。わからないことは仮説を立て、保護者や地域の専門家へと話を聞きに行く。また、子どもたちが興味・関心をもてば、地域で開催されている展覧会などにも出かけていく。このような小さな実践から、地域とつながり、交流が生まれることもたびたびである。そして、そこから保育が広がったり、深まったりしていく。

こういう試みが園単位ではなく、自治体と協働し、コンソーシアム（共同事業体）のようになっていけば、イタリアのレージョエミリア市のような街ができていくのではないだろうか。わが町、わが市の教育こそが日本で一番であると、互いに主張する日が来るかもしれない。研修も園を拠点にし、現場の向上に直接つながる創意工夫をして実施する。そうやっていくと、地域と行政を巻き込む幼児教育・保育の新たなムーブメントを引き起こし、本当の意味での「新時代」を迎えられるのではないだろうか。

#### ●Profile

妹尾 正教（せのお まさのり）  
（社福）仁慈保幼園 理事長  
鳥取県米子市にある本園「仁慈保幼園」を始め、「多摩川保幼園（大田区）」、「世田谷仁慈保幼園（世田谷区）」を運営しており、法人の統括園長を務めている。  
40～50年後のより良い社会のために、現場保育士と共に、保育の新と真を問いながら探求し創造し続けている。

## 未来へ向かう保育の質の向上とは

齊藤 真弓

良好な保育実践が紡ぎだされる場や協働的で応答的な組織の合意形成のプロセスとなるのは、各組織で起きる「対話」であろう。「対話」の場づくりを促進させるファシリテーター的役割を担う職員が各園に存在しているのか、また、誰が担っているのか。最近の私の関心事である。

保育実践におけるファシリテーターとは、保育の質を高めるために、具体的な経験→省察→抽象的な概念→積極的な実践などが循環するプロセスに寄り添い、相互尊重に基づいた双方向のコミュニケーションを促進する。また、そのプロセスの中で、一人ひとりのその人らしさが発揮され、互いに支え合う関係性と、子どもにとっての最善を語りつづける組織へと変化を促す人材であり、知識やスキル、何よりも人間尊重の精神で、様々な人々を巻き込みながら好循環を生み出す役割を担う人であると考えている。

自助努力で自園の課題解決の仕組みを醸成する、研究者と共同で園内研修を行う、外部コンサルティングを活用する等、組織の数だけ保育実践を検討する、課題を抽出する「やり方」は様々であろう。

心理学者：アーノルド・ミンデル博士が提唱した「3つの現実意識の階層性」の視点に立ってみると、保育とは、エッセンスレベル（言葉にできない直感・スピリット・タオ・雰囲気）とドリーミングレベル（言

葉にできる気持ち・願い・夢・理想・価値観）の2つのレベルとの行き来を経て合意的現実レベル（目に見えて合意できる事実・結果・仕組み・数値）が表出される営みであり、この営みこそが「対話」であろう。

では、この場づくりの役割を担うのは誰なのか。

保育という営みは、すぐに成果や結果が見えて現れるものではなく、だからこそ、自分たちの実践を振り返り、認め合い、問いだてをしながら、日々を重ねてゆく丁寧さと継続性が求められる。

未来ある園運営を活性化させ、何より「保育の質の向上」を担保・実現する組織の中核的存在として、「対話」のマインド（あり方）やスキル（やり方）を学んだ「ファシリテーター」を意識的に位置づけることが、真の保育の質向上に向かう組織となろう。これまでのカリスマ性や権威あるリーダーシップのもとで園運営を安定させてきた時代は終わりを迎えている。

相互尊重に基づいた円滑なコミュニケーションの中で、自園の課題は、自園で抽出し、明日を描く知恵やマインドを保育者一人ひとりが主体的に持ち寄り、「対話」し、構造化してゆく。この循環が、骨太で柔らかい保育文化を創造し、やがて、子ども・保護者・地域社会、そして保育者の幸せに繋がると考えている。

### ●Profile

齊藤 真弓（さいとう まゆみ）  
 社会福祉法人清遊の家 常務理事  
 同法人 うらら保育園 園長  
 保育ファシリテーション実践研究会事務局  
 保育におけるグラフィックファシリテーションの有用性について強く関心がある。